

第5回 岸和田市丘陵地区整備機構協議会 議事録

日 時：平成21年3月24日（火） 10：00～12：13

場 所：岸和田市役所 職員会館2階 大会議室

出席者： 久 隆浩委員

下村 泰彦委員

青木 信一委員

三原 寛憲委員

岡本 康敬委員

谷口 敏信委員

相良 長昭委員

角野 久義委員

大松 忠男委員

河野 博彦委員

黒川 孝信委員

辻本 富孝委員

森 一晟委員

山本 一晃委員

事務局：出原、森口、奥、小畑、笹島、渡邊、久保、株式会社八州 畑中、堀下

開 会 午前10時00分

《事務局》

おはようございます。皆さまお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。定刻となりましたので、第5回岸和田市丘陵地区整備機構協議会を始めさせていただきたいと思えます。本日、G委員とD委員が欠席されると連絡をいただいておりますのでご報告させていただきます。

では、委員長より開会のご挨拶をいただきたいと存じます。

《委員長》

おはようございます。今日は定額給付金の申請が始まるということで、大変な駐車場の状態ですけれども、これだけの賑やかさが丘陵地区にもできたら良いなと思っております。年度末になりますけれども、とりあえず今年度のいったんの区切りをさせていただいて、来年度に向けての話、ご意見いただきたいと思えます。よろしくお願ひします。

《事務局》

ありがとうございました。では改めて、議事の進行を委員長にお願いしたいと思えます。

《委員長》

では、早速議事に入っていきたいと思えます。次第の3番の「丘陵地区整備機構の設立に向けて」ということとございます。まず事務局より説明をお願いします。

《事務局》

内容の説明をさせていただきます。本日第5回目の協議会としましては、「丘陵地区整備機構の設立に向けて」ということとございます。

《各資料を基に説明しております。下記は要点のみ記載しております。詳しくは別添資料をご覧ください。》

○丘陵地区整備機構の役割について

丘陵地区整備機構は、「マネージメント・コーディネート機能」「仲介・斡旋機能」「推進・支援機能」の三つの機能を有し、丘陵地区の整備を進めていく上で重要な役割を担うこととなる。今後、様々な地権者の要望を実践する組織として更なる検討を行う必要がある。

○丘陵地区整備機構の設立について

丘陵地区整備機構を設立していくに際して、丘陵地区にある課題や問題点など専門的に検討する必要がある、現在の丘陵地区整備機構協議会と連携する「ワーキングチーム」を設置し、具体的な解決策や方向性を考えていくこととなる。

○「参考：和歌山県田辺市上秋津野地区の事例」について

地域資源を活かしたまちづくりを実践している上秋津野地区の事例から、丘陵地区のまちづくりに参考となるような組織の取り組みなどを紹介した。

《以上、各項目をそれぞれ説明後、》

以上でございます。

《委員長》

資料を説明していただいたんですけども、田辺市の上秋津野の事例は、ちょっと色合いが違いますので、後ほど時間をかけて議論をさせていただきたいと思っています。J委員も上秋津野で色々と情報交換や勉強をされていますので、追加の説明を受けながら、丘陵地区にどう参考になるのかということも議論させていただきたいと思いますが、その前に前半部分をもう一度簡単におさらいを兼ねてお話をさせていただきたいと思っています。

まず、機構の役割の整理をさせていただきました。資料1ページにありますように、主に3つの役割があるのかなと思っています。

1つは、マネージメント・コーディネートといって、この地域全体をどのようにしていくのかということを考えていく仕掛けを担うということが1点目。それぞれの土地所有者さんが具体的に土地を利用されていくわけですけども、下手をするとばらばらになってしまいますので、誰かが全体を見ていく必要があります、そういう全体を見る役割が整備機構の役割の一つ目の部分かなと思っています。

2点目の仲介・斡旋というのは、土地所有者さんがいろいろ考え、動かしていくときに、情報提供させてもらったり、色々お世話やお手伝いをする部分というのが2番目だろうと思います。

3つ目の推進・支援というのは、具体的に土地を動かしていくときに、整備機構自身もいろいろ打って出よう、という三段構えで動いていくというのが、丘陵地区整備機構の役割だろうというように整理をさせていただきました。これで良いのかどうかというチェックを後ほどしていきたいと思っています。

3ページ目は、それじゃ来年度どういう形で具体的に、整備機構の設立を念頭に置きなが

らこの協議会を動かしていこうかという話でございまして、先ほどの3つの役割と連動していますが、まず一番重要な、皆さんの土地を交換して集約をしていかないといけないということは今年度確認をしました。けれど、それじゃ具体的にどういう形で、どういうルールでやっていくのかということが、まだ全然話題にのぼっておりません。ここを来年度できるだけ詰めていきたいと思っておりますけれども、これはかなり専門的な知識とか技術が必要となりますので、土地の動かし方に得意な方々でワーキングをつくらせていただいて、議論をしたいというのがまず1点目です。それが4ページの一番上の「土地交換・集約のルールづくり」というところです。

2点目が、具体的に土地を動かさないといけない、お金のしなないと生活ができないので、どういう可能性があるのかという事を具体的に考えていきたいというのが、土地活用の可能性を考えるワーキングチームです。これも先ほどのルールづくりとは違う専門知識、技術が要りますので、少しメンバーを変えながら、2つ目のワーキングチームを動かしていただければと思います。

5ページの、もうすでに一番最初に動こうとしている「道の駅」、ここをどうみんなで上手く活用させていただくかということを実際に詰めていく作業を、3つ目のワーキングチームということを行うということで、具体的なこの3つのワーキングチームで詰めていきながら、要所、要所で丘陵地区整備機構協議会でワーキングチームに入っていらないメンバーさんも関わっていただいて、チェックをしながら、より具体化を進めてはどうでしょうかという提案が、今回の提案でございます。

ここまで確認をしていただいて、もしこれで「良いよ」ということであれば、来年度はこういう形でさせていただければと思います。

もう少し具体的にお話しますと、この機構協議会は、概ね2カ月に1度ぐらいのペースでやってきました。もう少しペースを上げられないかというお話がございましたけれども、私と事務局は、2カ月の間に2～3回打ち合わせをして、今日の様な資料をつくり上げてくるわけですが、私だけが入るのではなくて、そこに様々な関係あるいはお知恵を持って居られる方に関わっていただきながら進めていくという事に変えていくと、より具体的にワーキングチームとこの協議会の関係性みたいなものが上手く連動するだろうなと思っております。という形で来年は進めていかせていただいたらどうでしょうかというご提案です。

もう一度整理させていただきますと、協議会の役割、3点整理をさせていただきました。具体的にそこへもっていくために、来年度は3つの分科会で進めさせていただければどうでしょうかというご提案、この大きく2点をまず前半で確認をさせていただければと思います。今から意見交換に移りたいと思いますので、ご質問あるいはご意見いただければと思います。

《F委員》

これから進めていく上について、私が懸念してるのは、これから土地を集約して、交換なりやっていくということですけども、前からの話では、全体的に工事やるんじゃないしに、例えば1期、2期、3期と工事をやるとした場合、1期工事区域と3期工事区域との土地交換となった場合、3期目やったら例えば10年先や、1期目の工事は2、3年のうちやというて、土地交換ができるかどうか問題なんです。例えば保全区域の土地を持っている人が、都市空間なり農空間の、農地を欲しいとなって、最初の工事をするところを希望した場合に、それを全て調整できるかどうかの問題が1点。

もう1点は、「道の駅」の件ですけども、事務局の方では「道の駅」とか見ていただいているか分かりませんが、どうも大阪外環状線沿いでは集客人数がなかなか難しいと思うんです。僕は稲葉に住んでいますけど、例えば蜻蛉池公園は、天気の良い日でしたら、土曜、日曜日になると駐車場が一杯です。そういう客を集客できるように良いのではないかと思います。平日でも年配の方が孫と散歩している人が50人~100人は居るので、「道の駅」の予定地では外環の所となると車に乗って行かないといけないので、やはり地元の人が散歩や、公園に来たついでに寄るといような形をとれば集客しやすいんじゃないかというその2点が気になります。

《委員長》

1点目は、そこも含めて、来年度ルールづくりのところで検討したいなと思ってます。不都合ができるだけ起こらないようにということです。

先ほどは整理をわざとしなかったんですけども、F委員がおっしゃるように、都市的な利用をされる方というのは、今の状況ではできませんので、ある一定の所に集めて、いわゆる市街化区域に編入をして、都市的な使い方ができるようにしていけない訳です。

ところが、農的な部分というのは、今でも使える訳です。だからそのあたりをうまく切り分け、連動させながらやっていく必要があるんじゃないかとは思ってるんです。

《F委員》

訂正します、都市空間部分を希望する人がたくさん出てきて、農地は今使えるけども、第1期工事の所に土地を希望する人が沢山出てきた場合と、山の保全地区の人が都市部分の所を希望した場合に時間的にずれが出てくると思うんです。1期工事は時間的に早くできるけど2期、3期工事は、1期工事がある程度順調に進んだ後と言う事になるのかはまだ先の話ですけども、その辺の兼ね合いなんです。それを地権者の方に聞かれた場合、どういうふう

《委員長》

それは希望者の面積がどうなのかということに関わるんですけども、できるだけ一挙に

都市的部分というのは造成工事した方が、工期的にも効率的ですね。ですから1期、2期、3期というような形には他の整備事業を見てても、なかなか、なっちはいかなの違うかなとは思いますが、そのあたりも含めて、土地所有者さんの意向も踏まえながら、ルールづくりと絡めていけばいいんじゃないかなと思ってます。

「道の駅」はもう走り出してるという所もあって、変えるのは難しいと思うんですが、逆に言うと、私も子供が小さい頃は蜻蛉池公園までわざわざ50分車に乗って越させてもらいましたので、雰囲気的には分かるんですけども、だいたい今の家族連れというのはワゴン車に乗って、みんな車で来ますよね。その人たちに情報提供をうまくすれば、帰りに「道の駅」に寄って、何か買って帰ってくれるという可能性も、かなり高まってくるんじゃないかなと思ってます。

たまたま先週、和泉市の会合を、「道の駅」のところにあるコミュニティセンターでやったんですけども、土日はそこそこ入ってますね。だから外環沿いでも、うまくPRさえすれば、可能性あるかな。あるいは逆に、わざわざ来させる魅力を、我々が知恵を絞ってつくっていくということが必要かなと思うんです。

《事務局》

F委員から「道の駅」の話が出ましたので少し説明したいと思います。今、F委員が言われた様に、予定地は外環だけじゃなくて、蜻蛉池公園とか、神於山とか、いろんな周りに資源がございますので、これらとの連携が大事かなと思ってます。道の駅の北側には蜻蛉池公園にも繋がっています。来場者が歩いて蜻蛉池公園とも連携していくというようなイメージを持っています。また、車の動線についても、外環からではなくて、浜側からの進入や将来的にはバスの誘導も出来れば良いなとも考えております。先ほど委員長が言われたように色々と組み合わせて、計画に反映していきたいなと考えています。具体的な内容は今後詰めていきますので、そのへんも意見をちょうだいさせてもらってと思ってます。

《委員長》

そのあたりは、さっきの3つ目のワーキングチームの非常に重要なテーマとして、来年度検討することになるだろうと思います。

《A委員》

二次的な問題になるんですけども、自然保全ゾーンということで話していただいておりますが、私自身はこれに関心がありまして、郊外の里山運動、記載をしていただいております。あくまでも二次的な問題で結構なんですけども、ワーキングチームができた場合、全体で討議するのか、あるいはある程度具体的な話に参加していくのか、どこかのワーキングチームに入りたいと思うんですけども、どこに参加していけば良いのかと思ってるんです。

《委員長》

今のところは、おそらく全体会の中での議論が多くなってくるんじゃないかなと思うんです。この3つがすべてを網羅している訳ではなくて、重点的に時間をかけてみんなで議論をしたり、勉強をしていかないといけないものが3つ上がってるんです。だからそれ以外のところで考えていかないといけないものというのは、自然保全のボランティアの方がどう入っていただくかも含めて、幾つか残ってるんです。そういうところは機を見て、機構協議会の中で議論をさせていただければと思ってますし、もしそこがもう少し詰めていかないといけないという話になれば、場合によったら4つ目のワーキングチームを作らせていただいて、やっていく必要があるんじゃないかなと思ってます。

そういう意味では、とりあえず今のところ緊急に詰めていかないといけない話題が3つという事になってますので、4つ目、5つ目など機構協議会の中で、こういうところも早く詰めていかないといけないとだめだという話になれば、新たにワーキングチームを立ち上げていくということになっていくのかなと思うんです。とりあえず今のところは機構協議会の中で機を見て議論させていただくという段取りにはなっております。

《I 委員》

丘陵地区の役割についてということで、マネージメントというか、コーディネートしていくとか、こういうことで上げていただいておりますけれど、持続的な仕組みづくりというのと、地域の活性化、地域の情報提供、こういうのを上げていただいておりますけど、できたら具体的に、どんなことを構想されてるのかなと思います。もしこんなあるよということがございましたら教えていただきたい。

《事務局》

従前の検討委員会からご議論いただいております丘陵地区整備計画基本構想にも出ていますが、地域の活性化を目指していくという部分があります。情報提供というのも当然必要ですが、まず何をもって地域を活性化していくかという部分が非常に大事だと思います。具体的にその活性化のメニューとはなんぞやという部分をこれから考えていかなくてははいけませんし、活性化の内容ができれば、情報提供をして、より一層活性していくというような流れになるのかなと思います。

ですから今、現時点で、活性化とはなんぞやと言われると、なかなか難しいんですが、ただ、やっぱりこの地域が良くなれないといけませんし、この地域だけに限らず、その周辺エリアも含めて良くなれないといけませんので、それを含めて活性化とはなんぞやという部分を、これからご議論いただければと思っております。

このあとにご紹介させていただきます上秋津野地区も、そういう活性化された地区として

頑張っておられる地域ですので、そういう地区の良いところを参考にさせていただいて、進めていけたらなとは考えております。

《I 委員》

今、考えている地域はどのエリアを対象としているのかによって違う話になると思うので、これから話の中で、どの地域として考えていくのか、進めていくか教えてください。地域の情報提供は、どこへ情報提供していくのかなど。

《委員長》

私のほうからも補足的にお話させていただくと、先ほどご質問いただいた、持続的ということとも絡むんですが、何を持続させるかという点でいうと、3つあると思ってまして、1つは経済を持続させるということ、これがないと生活できませんので、金を回していくというのが一つです。

一方で、これからのご時世、環境に配慮しないと、資源食いつぶしてしまうとだめですので、環境に配慮して、環境とか資源を持続させていくということが2点目です。

3点目は、社会、村を持続させていかないといけない。

この3つは当然絡まりあっていくと思うんです。そういう3点を大切にしながら、回していくための仕掛け・仕組みというのはどういうことになるのかなと思ってます。

今日は後ほど上秋津野地区をもう少し議論させていただきたいと思ってますけれども、すでに40年以上、自分たちの手でどどん村を良くしていますので、こういう様な形が丘陵地区でも取れないかということです。そうすると20年、30年たったときに、岸和田の丘陵地区に見に行ったらええやないかみたいな話になれるような形で、みんなで知恵を絞りながらやっていければと思いますし、それを全体的に考えていく仕組みとして、この整備機構というのが重要で、地権者さんに土地をお返ししたらあとは勝手に使ってくださいということでは、なかなかいかないだろうなと思います。

上秋津野地区のご紹介をJ委員から追加でやっていただければもっと具体的にわかると思うんですけれども、今それぞれの村というか、集落ごとでは一生懸命に色々考えて、村の人が集まられて、意見交換されてるんですけれども、丘陵地区全体としてどうなのかということになってくると、もっともっと、この地域全体の意見交換会とか、マネジメントみたいなものもしていけないといけないので、それを市役所とか、私たちも入りながら、もっと層を厚くしながら、継続的に何十年付き合っていければなと思っております。

ちょっと冗談めいた話をすれば、市役所のメンバーでも、渡邊さんは、まだ定年まで20年以上あるので、部署が変わってもこういう所に参画していただきたいと思いますし、出原部長も数年で退職になったときに、今度は機構の理事長として入っていただいて、死ぬまでここに付き合ってくださいとか、そんな形で、色んな方の知恵とか手を出していただきながら、

みんなでむらづくりをできたらいいのではないかと思いますし、それが次の、I委員のご質問にも関わるんですけれども、この150haの区域だけが元気になるんじゃなくて、ここが中心に元気になっていくと、岸和田市全体が元気になっていくはずですので、そういうことを考えていければなと思っています。

さらにこの前岸和田市都市政策研究所で市全体の活性化の話をさせていただいてたんですけども、浜側は元気ですね。お金も回るようになってる。JR沿いの山裾部分は、いま区画整理事業とかが入って、いろいろと土地が動くようになってるし、東岸和田の再開発も動きますので、色々動きはじめてます。今度は丘陵部分ですね、丘陵部分にこういう新しい仕掛け・仕組みが動きはじめると、岸和田全体としてもバランスよく発展するのではないかと思います。

ただ、逆にこの前、JR沿いの方々と話をしたんですけども、最近、丘陵部分に市役所もこういう形でかなり重点的にやっていますね。浜側は今までも重点的にやってきました。今度丘陵部分に重点的にすると、真ん中のわしらは置いていかれるんと違うかというような、逆の心配が地権者さんの方から出てたりするんですけれども、それは置いていきませんよ、やっぱり3つがバランスよく発展することで、岸和田全体が発展をしたらなと思っていますし、ついでお話すると、いまでも浜の、今度の「道の駅」もそうですけれども、漁協さんと農協さんがタイアップしてやる部分も出てくるので、先ほどの話をさらに発展させれば、丘陵地区が元気になっていくことが、丘陵地区そのものが元気になるだけじゃなくて、岸和田全体が連携をしながら元気になれるような、そういう仕掛けみたいなものを組み込んでいくということが非常に重要になってくるので、そんなことをちょっと時間をかけて考えさせていただければということです。

だから先ほど事務局から言っていたように、内容、具体的にどうですかといったら、これからですということしか言えないんですけれども、こういう方向性で来年度以降も議論したいなと思っています。

《J委員》

今、I委員の言われたのと重なる部分もあるんですけども、今日の説明の中で、ワーキングチーム的な事で進めていくということで、たぶん構想から順番に具体的な形へ進む、また階段一つ昇っていけるなというのが一つです。

特に中短期的な事から言いますと、この3つぐらい、ワーキングできちっと論議して、形を整えていくのが良いのかな。当然、さっきF委員がおっしゃったように、いろんな問題もあるでしょうし、その辺も整理しながらこの中でやっていくのが一番良いですし、時間的にもこういう形で進めれば、ある程度の目途が立って、進めていけるかなというところがある。

ただ、1点だけ、それはそれとして、進め方としてはそういう進め方が一番いいと思うんですけども、気になりますのは、木を見て森を見ずということに、少しなる可能性もあるな

というのがあって、できましたら機構協議会の本体が、特に今まで丘陵地区全体の整備計画の基本構想もきちっと積み上げてきてるので、非常に概念的な部分が多かったんですけども、少し全体を横につなげるような、マスタープランみたいな形のを、多分委員長がバランスを取っていくと思うんですけども、その辺のバランスが、具体的な所へ入っていくと、本来何のためにやっていたんだという一番大事な目的が少しずれてくるような感じというのを、私自身も組織の中で仕事やっていると経験しますので、ぜひともその辺だけ、先ほど持続的とかいう事もありましたし、非常に大事なかなと思いますので、できるだけ協力もしますし、やらしていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

《委員長》

貴重なご意見だと思います。J委員のご提案は、地権者さんお一人お一人が、自分の土地がどこいくかだけを考えるのではなくて、全体を見通しながら、それじゃ自分はどう動いたら、自分のためにもなるし、地域全体のためにもなるかということで検討するような、そういう大きな見取り図もいつも忘れずに検討したいなというご提案だと思います。ありがとうございます。

《副委員長》

3つのワーキングチームで内容をさらに煮詰めていく必要があるという話を、J委員からしていただきましたが、私もそれに同感です。各チームの目的が書かれてあるんですが、まず、どういう項目を基本的に整理するか、さらにこれらの項目よりさらに詳細な部分までの課題整理が必要だと思います。それを受けて検討が始まり、チームの中でさらに議論して、内容を深めたり、もうちょっと範囲を広げようとかということ議論できるように、最初に頭出しをちゃんとしていただくのも非常に大事かと思います。その整理された課題があれば、あとは部会ごとに、それをさらに広げたり、狭めたりというふうなところから始めることができようかと思います。

そうなってくると、J委員もおっしゃってましたように、協議会がそれらの連携を取ることが重要と言うのを、私も非常に痛感しています。各部会のタイムスケジュールを組むのはなかなか難しいんですが、議論する内容がほかの部会にもちゃんと通じるように、各部会間で風通しよくし、どれぐらい進んで、どういう議論がされ、次にはどういう課題が整理されるかという情報提供をしっかりとやる必要があるかと非常に感じております。

ちなみに、「道の駅」につきましては、私、2週間前の日曜日、和泉のリージョンセンター行って来たんですけども、結構人が来られてました。ただ、蜻蛉池公園の春先もしくは秋の来訪者、特に子供さん連れて来られる年代層とは違う年代層の方々がリージョンセンターには来られてますので、さらに公園利用者の、まだお子さまを連れて来られる方々をひっばってこれる情報、材料供給プラス、そこへ来たら何かお土産、お土産というのはモノだけじ

やないと思うんですけれども、情報なり、いい環境なり、そういうことが持って帰れるという雰囲気をちゃんとつくるということが、公園からのネットワークで誘導させてくる一つかなと思います。

《委員長》

前半部分のお話は、おそらく来年度の1回目の協議会の際に、こういうような形でワーキングチームを立ち上げたいと思いますという議論になると思います。そこまでの作業として、より具体的にしていいただければと思っております。

具体的に言うと、和泉市の「道の駅」の一つの名物は、米粉パンです。米粉パンをわざわざ買いにという方がかなりおられます。

《N委員》

色々お聞かせいただいて、手段的な話が先々いきますと、非常に分かりにくくなってしまって、先ほども出てました丘陵地区どうするんやという話、すごい大事な事だと思うんです。

ポリシーみたいなものをはっきりさせておかないと、今色々出てきました、例えば「道の駅」ひとつにしても、利便性が良いから流行っているという所と、そこに売ってるものが他に無いものを売ってる、直売所なんかは普通のスーパーと違って、買い取りでそこは売ってるんでなしに、農家はその都度に場所を借りて持って行ってるわけです。朝持って行って、昼なくなったら持っていくという絶えず持って行ってる。非常に新鮮や、そこにしかないというので客が来てるんで、いま和歌山でもあちこちにありますが、直売所は決して利便性のあるところが流行っている訳でなく、そうでないところも流行ってる所も沢山あります。

要するに何を置いてどうするかという、そのポリシーがはっきりしてる訳です。そうしますと、周辺の土地利用もみなセットになる訳です。近くの神於山農地があったら、そこでそれなりの振興をして、そのものを持ってくる、例えばエコ農産物であるとか、トレーサビリティ（流通履歴を確認できる）をきちっとしているものがここには売ってる、そうするとお客は来ますね。

そうするとそこにおかしな立地はできないから、土地利用もセットの話になる訳です。その土地利用の話も、今、1期、2期工事という話出てますけど、交換分合みたいな、土地を触らないで、これとこれと交換みたいな話がありますね。そういう土地があって、換地みたいに、従前いったんガラガラとやっちゃって、新たに地番入れていくやり方、これは一番はっきりしてるんです。もちろん農業側の土地利用は圃場整備、都市側は区画整理事業、入れる法律も事業も違いまして、区域分けてやるとか、全部違ってきて、ぶら下がる手法も全部違ってくるので、そこをどういうところにするのかということを決めていかないと、あとのやつが、あっちいきこっちいきするおそれが出てくるんじゃないかという気がするんです。

ですから上秋津野の話見ましても、おそらくこういう所ですから、農村が持っている、こ

の地域の固有の資源をいかに売ろうか、やっていこうか、また、その地域がもってる、例えば担い手がないとか、みんなまち行ってしまっ、雇用の機会がないとか、色々あると思うんです。それを克服するために、農業生産だけじゃなしに、ジュースがあったけど、加工も誘致してくる、そうすると土地も用意しなきゃだめですね。例えば他所からやって来る工場は、都計法上規制があるけど、地域農作物加工は立地できますから、だからそういうフレームをきちっと固めれば、そのあとぶら下がってくる事業も違うので、そこは丘陵地区の基本構想の中の地域の活性化なんぞや、その活性化を、どこでどういう形でやるのかということは固めといたほうが、あと土地交換の話、土地の活用の話、「道の駅」の話も、全部つながってくると思います。

土地利用だって、そこをどう利用するかという話と、資産運用的にどう運用すれば儲かるんやという話は別で、儲けるだけであればその土地を人に貸すなり、高く売ればいいわけです、駐車場でも何でも。しかし、ここで考えなければならないのは土地利用と全部セットになる話ですから。そのところを詰めておいた方が話がまとまるし、今、喫緊の課題としてよくわかりますので、皆さんおっしゃってるので、こういう形になってると思うんですけど、ある段階で、また逸脱するおそれがあるん違うかなという気が、ちょっといたしました。

《委員長》

整理をさせていただきますと、去年、一昨年と2年間かけて、そういう大きな方向性というのは、基本構想をつくらせていただいて、概ね確認をさせてもらっています。先ほどJ委員がおっしゃっていただいたのは、それがより具体的になればなるほど、去年まとめさせていただいた基本構想の大きな柱を見失う危険性があるのではないかとということで、だから常に構想の内容、方向性というものをきちんと確認をしながら話を進めていく必要があって、先ほどのご提案も、具体的になればなるほど危なくなってくるので、そこに念を押されたご意見だったと思います。

先ほどの第1のワーキングチームといいますか、土地利用の分科会というのは、おそらく私の関係の限りにおいて言うと、日本ではじめて農的な交換分合と都市的な交換分合を同時にやるということ、ここでチャレンジしてみようということになってくると思いますので、そのためには、色々な方々のお知恵をいただいて、モデル的なことにしたいなと思っておりますし、場合によっては、この前から事務局にはお願いしてるんですけども、国の方も入っていただいて、都市的なところでいうと国土交通省の近畿地方整備局になりますし、農政のほうも入っていただいて、日本のモデルとなるような交換分合の仕方を一緒に検討させていただければなというようには、個人的にはお伝えはしています。

場合によったら、新しい法律をここでつくってもらうような、そんなことも理想的には出来たら良いなというように思っております。この3年でも、地域の活性化でいろんな法律が新しくできています、去年の6月は「歴史まちづくり法」という法律ができて、これは

6省庁の共管になってますし、いま経済産業省中心に準備してるのは、商業の活性化を地域コミュニティの活性化と絡めてできるようにしようというような新しい法律をいま準備中ですので、こういう総合的な事業を進めていくための国の支援というの、かなり充実してきているので、可能性としてはないことはないかなというようには思っております。だから経産省と農水省と国土交通省と環境省、4省共管で法律つくってもらって、モデル的に岸和田から始めるという可能性としては、ないことはないかなと思ってます。

そういう情報交換とか、人脈もってらっしゃるE委員なんかも、色々とお知恵をいただいて、一緒に頑張っていたいただければと思ってるんですけども。

《C委員》

ワーキングチーム設置ということで、3ページ見ていると、協議会でワーキング、フィードバックしていろいろやっていく、あとから設立する整備機構へということになってるんですけど、具体的にどういうふうな、例えばこのワーキンググループでまとめて、この機構に立ち上げてですとか、そういう方向でまた会議進めていくのか、方向性ですね、どういう運営をされていくのかなということです。分科会を立ち上げて、分科会としては3つできて、その各々まとまった内容が協議会にまた出てきて、それをまとめていくとか、いや違う、ここはこれで、どういう方向性でいかれるのか。

《委員長》

先ほど申し上げましたけれども、今までのペースでいけば、2カ月に1度か3カ月に1度、こういう全体会やります。その間にそれぞれの分科会でテーマに沿って煮詰まった議論を、2回ぐらいやっていただいて、その内容を全体会議に図りながらという、そういう連携を持たせながらやっていくというパターンになっていくと想定してるんですけども、よろしいでしょうか。

具体的には、来年度の1回目のときに、分科会の進め方と、スケジュールがどうなっていくかというのは、お示しはできると思うんですけども。

《L委員》

今、上秋津野地区を見せてもらっていると昭和30年頃からやって、50年かかっていますね。開発するのにこのくらい長い年月がいるもんかいというのが第一印象です。それはそれとして、委員長が前からおっしゃってるように、「道の駅」構想が起爆剤になって、発展していったら良いなと言う事をおっしゃってたんですけども、我々懸念するのは、「道の駅」構想が実際どんな形で、どう動いているのか、さっぱり見えて来ない。どういう形で、いつ頃、どうなるのか、現在どのようなもので話が進んでるのか、そこらあたりちょっと聞かせてもらいたらなと思うんです。

《委員長》

実はその中で現状ご報告を事務局よりしていただくと思ってたんです。まだ上秋津野を紹介していないので、上秋津野から進めてから後ほどご紹介をしていただけたらと思います。

上秋津野の話は時間を取ってやりたいと思ってるんですけども、それ以外のところで何かありますでしょうか。

《E委員》

段階的な整備ということが話題に出ているかと思うんですけども、都市的なところに限らせていただきますと、こういったものを第一段階のものとして選んで、開発してもらうかということになると、大変冷たい言い方ではあるかと思うんですけども、まちづくりに対して意欲的な方を選んで、その方を先導的にまちづくりに参画してもらうというのが手取り早いのかなということだと思えます。

そういうこともありまして、選択については、ご希望で最初のところに行きたいといったようなところもあるかと思うんですけども、またそれは法律的あるいは土地利用的に整合性を取っていかなきゃならないところはあるんですけども、そこでメニューを提示しつつ、あるいは自分がこうやりたいというものを強く出してくる人を選択的に、優先的に入れていくことでまちづくりを進めていくというのが、時間的なペースからいって一番効率的にできるのかなと思っておりますので、そこらへんも選択の基準の中に、どういうふうに入れていくかというのは、皆さん集まってからでは非常に難しい点があると、私は考えてはいますけども、そういった視点で吟味をして、みんなで議論をした中で、こういうまちづくりをしようや、第一としてはこういうものをつくっていいや、それをつくる人は誰々に頼もうやといったようなことを、表面的な議論で、ただ単に土地が欲しいよ、だからこういう換地するよということではなくて、まちづくりに対する深い思いみたいなものを強くこの中に込めて、土地利用計画なり、まちづくり計画なり立てていく必要があるのかなというふうに感じました。仕組みとしては、今はないので難しいんですけど。

《委員長》

そのあたりは土地利用の可能性を考える分科会の極めて重要なところで、いい事業者さんを見つけてくる、そういう作業も、機構なり分科会の非常に重要なところかなと思います。

ちなみに、情報提供させていただきますと、岬町で関西国際空港の第2期の埋立の土取りの跡地が、今、どうするかということで動きはじめてるんですが、この前もチラッとご報告させていただいたように、3社ほど農業関係の土地利用が決まっていたんですけども、これだけ世界情勢が悪くなってきた中で、3社とも出て来れないという判断になったんです。いったんリセットしよう、御破算にしようという話になりました。

この前、私の所に大阪府の人が相談に来られて、もう一回業者選定を仕切り直しでやりたいと思ってるんですというご相談をいただいたんですが、そのときに聞いた話で、ちょっとまずいなと思ったのは、事業者さんが産廃業者さんだということでした。そういう処理業者さんはいくらでも土地欲しいと思ってるので、売り込みがあるんだという話になって、でも、それはちょっとまずいですね、数年間の土地利用でお金を稼ぐためには良いかも知れないけれども、まちのため、村のため考えたときに、そういう事業者さんで本当に土地利用をしても良いんでしょうかという話をさせていただきました。

そういうところの目配りというか、評価の軸をちゃんとやっという方が良いですよというのが、E委員の今のご意見だったと思いますし、ちょっと情報提供させていただいた方が良くかなと思うんですけれども、うちの大学の卒業生で、もう60を超えていらっしゃる方ですけれども、在校生にこういうすごい人もいますよということで、ご紹介させていただこうということで、講演会をもったんです。中村ブレイスという会社の社長さんです。

中村ブレイスというのは何の会社かというと、義足とか義手をつくっていらっしゃる、世界的な企業ですけれども、本社が島根県の太田市大森町という所にございます。石見銀山のすぐ足元ですけれども、大森町は集落の人口が480人のところですよ。480人のところに、世界的な企業としていま立地をしていて、従業員さんが70人。

何が皆さんにお示ししたいかということ、70人の従業員さん、家族も含めたらその3倍ぐらいですから、200人ぐらい居られるわけです。人口の半分弱が中村ブレイスの関係者なんです。

今から30数年前、26歳のときに、中村さんは郷土である大森町で会社を起こされました。うちの経営学部の先生も聞いていまして、経営学部の先生が、なぜ京都とか、大阪とか、東京ではなくて、大森町でわざわざ26歳で会社を起こしたんですか、成功の確率はあったんですかと聞かれました。

中村さんの答えは非常に見事な答えでした。「1%なかったかもしれない、島根でももっと都市部に行った方が、会社としてはうまくいくかも知れない。でも、自分が生まれ育ったこの大森町で、自分が会社を起こして、次の世代に仕事を用意してあげることも自分の責任だと思っているし、ここの出身者が村から出て行くから元気なくなってるん違うんですか、外から呼ぶ前に、まず村の出身者が自分の村のために何ができるかということを考えて、自分はたまたま義手の技術を持っていたので、それで業を起こして、人に仕事を与えるということが自分の使命だと思ったので、成功の確率以前に、まず村で生まれ育った自分のやるべきことをやっただけだ」という、見事な答えをされたんです。

それも先ほどのE委員の話の延長上にあって、本当にここの地域のことを思う事業者さんに来ていただくということが、非常に重要ではないのかなと思っておりまして、ここのメンバーさんで、M委員もそのお一人だと思うんですけれども、自分が生まれ育った村のことを思って、本業は農業じゃないですけれども、それでも自分の知恵をいかに自分の生まれ育っ

たところに活かせるかというところで頑張っていたらと理解をしますので、こういう方々がいかにどれだけ出てくるか、必ずしも農業だけではなくて、この地域の出身者で、農業以外で業を起そうあるいは起こしてらっしゃる方もおられるかも知れませんが、そういう方々に是非ともこういう所に来てもらうというような、そういうつながりのつくり方みたいなものもあるんじゃないかなと思っております。

また来年度以降もこの話、具体的に一つ一つ詰めていきたいと思っております。少し長くなつてますけれども、このまま続けさせていただきたいと思っております。

上秋津野地区については、J委員も先ほどお話をさせていただいたように、具体的に一緒に勉強されておられますので、追加のコメントをいただきたいと思っておりますが、私もJ委員と岸和田市の都市政策研究所の研究会で色んな所を回らせていただきました。愛知の足助町とか、大分の大山町とか行かせていただいて、J委員がいつもおっしゃってる言葉で印象的なんですけれども、うちの村の方が資源あると、いつもおっしゃいます。行けば行くほど、うちの村の方が資源ある、可能性も高い、どこが違うんやろかということで、いつもおっしゃってまして、その意味では、外の勉強が実は可能性のより高い丘陵地区の参考に必ずなるんじゃないかなと思っておりますので、そのあたりの補足説明をいただければと思います。

L委員の先ほどのご質問でいうと、40年後、50年後に花咲いたんではなくて、40年後、50年後、更に良くなつてるという事でお聞きいただいたらと思うんです。昭和38年から一つ一つ、いろんなことを成功させながらやってることがご理解いただければと思いますので、そういう目で、耳で、聞いていただければと思います。

《J委員》

上秋津という、いま1000軒ぐらいの村です。軒数は少しずつ増えていってます。この村を通過して山手へ行きますと、高尾山まで抜けていく道になって、その辺からもう少し田辺に近いところに家を建ててということで、少し人口も増えてます。

私自身は、いま2カ月に1回のペースで、上秋津で、一泊二日で、地域づくり学校という学校がありまして、その受講生ということで参加をさせていただいてます。たまたま外部からの受講生はそんなに多くなくて、北海道とか、長野県とか、そして岸和田からということなんです。

私、ここへ行かせていただいて、何がということで考えさせていただいたときに、この社長さんも地元でみかんつくってはる、ほとんど農家の方、そこで住んでる人が主体的にやってるんです。

もう一つは、主体的に地域づくりをやられてる地元の方は、非常に人を使うのも上手ですし、とりあえず関わりのある人はすべてむらへ引き入れて、そこでむらのために仕事してもらおうという、そういう仕掛けが非常に上手です。そういう意味では、私、最初に行ったときに、「このむらの印象は？」と聞かれたときに話させてもらったのは、昔、学校でダーウィ

ンの進化論という、小さい島で、動物がどんどん、どんどん進化していく、それをたとえにして話をさせていただいたんですけども、むらがどんどん変わっていくというのは、ダーウィンの進化論と似てますねということで、強いものがいつまでも生き残るということではなしに、どんどん周りが変わっていくのに対応しながらむらづくりをしてきた、そこが残ってるんやな、だからまさしく秋津野はそんなとこですなという話をさせていただきました。

「秋津野の未来への挑戦」ということで、説明させていただきます。

秋津野ガルテンというのが、いま事業として地域の人で運営しています。人口が3,350人で1,100軒です。高速ですと10分、15分ぐらいで、場所的には、丘陵地区から内畑町、大沢町ぐらいの感じの所やと思っていただいて結構です。

昭和31年に上秋津が周辺の村と合併したので、そのときがこのむらの歴史的なきっかけやということで、上秋津愛郷会というものをつくったんです。私の村でもそうですけども、村の財産があった場合それを全部村人へ割ってました。しかし、ここはそうせずに、昭和32年に社団法人をつくって、結構利益がありましたので、地域の教育の振興であるとか、住民福祉であるとか、環境保全、この3つにだけそのお金を使うということを決めてその財産を社団法人化してしまってます。

今の秋津野ガルテンというのは、上秋津の旧小学校です。その場所は上秋津で一番一等地なんで、田辺市は住宅地として売りたいんですけども、ここも上秋津愛郷会が田辺市から小学校の用地を、たぶん億単位だったんだと思いますけど、買い取りました。

この村は農業の地域です。どちらかといったら、岸和田の内畑町と一緒に、いまでも柑橘、みかんばかりの所です。ただ、和歌山は一時期、梅で農業支えてたということで、ここも梅との複合系ありますけど、大半は柑橘です。たぶん日本にある柑橘、特に晩柑類、ほとんどここに行ったらあると思います。50数種とも、60数種とも、それだけの種類の柑橘類が入ってます。実際に出荷したりしてるのは、今、数種類の柑橘関係を収穫してると聞いてます。

先ほども委員長からありましたけども、一つは経済です。むらを支える経済がここは農業やということで、そのへんについてはずっと位置づけて、農業で飯が食える状況、それを常につくってきてるのが事実です。温州みかんが非常に危機的な時代が何回もありましたけども、そのときに思い切ってありとあらゆる柑橘をここで栽培しようということで、取り組んだ結果、いま何とかまだ経済的には持ちこたえてるというのがあります。

ただ、途中から人口が増えて来てますので、田んぼの間に家が建ち並んだりとかいうのがあります。だから古い住民と新しい住民の関係が色々あったんですけども、このすごく上手やなと思うのは、新しくきた方々、新しい住民の方もどんどん地域へ取り込んでいってる、そんな取り組みもきちっとされてます。色々問題はあったにしても、今はその人らの力も借りながら、地域をつくっていってるというのが一つです。

地域として色んなイベントをやったり、丘陵地区でいうと神於山という感じになる高尾山というのが一つのシンボルになっている山を中心に、登山マラソンをやったり、これも地域

として企画して、みんなに高尾山という、歴史も含めて知ってもらおうという、一つの表れとしてのマラソンを毎年やっています。

記念塔など古いものを新しく建てたりとか、このへんも地域として積極的にやっています。

地域づくり塾ということで、秋津野塾があります。見ていただいたら、岸和田にもある市民協議会とよく似てると思います。そういう意味で、秋津野塾が秋津野という全体の地域づくりをやっていく主体的な組織ということで、いま運営をされています。

ただ、非常に多方面にわたっていますし、地域以外からのいろんな情報も入れながら、積極的に、地域が良くなるためにはどうしたらええやろということで、考えながらやってるのが現状です。

秋津野塾は、活力とうるおいのある郷土づくりを推進する、それが一つの目的としてはっきりしておりますので、都会にはない香り高い農村文化社会の実現を図る、そういう意味でこんな活動を地域としてやっています。

そんな活動を評価されて、むらづくり、地域づくりとして、農林水産省が地域として天皇杯を授与したというのがあります。天皇杯は多分どこもあまり受け取ってないと思います。近畿圏ではここが初めてでしょうし、そのことが地域でむらづくりをやってきた人の一つの大きな、ある意味ではご褒美やったし、これからも頑張ろうという意味合いのものでもあったというふうに、いろいろ話を聞くと感じます。

地域内外との交流ということで、場所的にイメージしていただくと、山村ですので、上秋津小学校、その地域に一つ小学校があります。そこで農業体験学習ということで、私の行ったときのイメージからすると、1年生芋づくり、これは老人会と農家が担当、3、4年生の野菜づくりは老人会、公民館、農家、5年生、6年生は青年部、ある意味では農業後継者の方々です、それと公民館が中心になって、体験をさせてあげる、こういうのは地域としてもちゃんと決まっています。

自分とこの子供、孫が小学校行ってる、行っていない関係なしに、地域の人で気持のある人は年間2,000円、学校へ寄付するみたいです。年間で70、80万円ぐらい集まるみたいで、それは学校が、子供たちが新しくサッカー始めるといったら、教育委員会からの予算とは別に、ボールを買ったり、遠征するのに交通費に使ったりということで、自分の子供、孫というより、地域の子供を学校に預けて、学校で育ててもらってる、そういう感じです。だから地域が手伝ってあげてあたりまえやし、隣の小学校よりもっといい環境、もっといい条件で地域の子供を育てようという、そんな感じのあらわれがあつての、こういうメニューですし、1件2,000円、気持のある人は寄付しよう、そういう地域です。

農業という経済を支えるために、直売所「きてら」を建設しています。最初は小さいプレハブでしたが、今はもっときれいな、ログ風の建物を建ててやっています。

そこでは、「きてらセット」という、地域で取れた、それだけの種類の柑橘類がありますので、1年中いろんな柑橘、詰め合わせにして、セットで送っています。さっき俺ん家ジュース

がありましたけども、あのジュースも、中身は時期、時期で入ってるものが全然違います。たぶん温州みかんからはじまって、晩柑類にきて、今だったらデコポン絞ったりとか、色々考えていますし、ここは地域の人が、自分らでお金を出し合って、出資して、「きてら」という直売所をつくってます。地域の経済をそういう形で支えてきてます。

秋津野塾結成から5年ということ、どんどんむらづくり、地域づくりをしても、まだまだ環境変化のほうに激しいですから、いろんな問題や課題があります。ここできちっと整理したのは、「秋津野塾未来への挑戦」という冊子をつくって地域づくりのためのマスタープランを制定したんです、平成12年～14年までかけて。それから10年先の秋津野の地域の将来、こういうふうにしていこうということ、とりまとめをされています。

作った当時は、地域1,100軒、その1軒1軒すべて配ったらしいです。ほとんど全軒ぐらいアンケート調査をしたり、どんなむらにしていったらいいですかとかという希望を聞いて、最終的にはこういう形に地域をしていこうという事を全部まとめてつくった本です。

ただ、前半部分は上秋津の歴史、愛郷会のこともそうですし、高尾山のこともそうですし、ここはどんな歴史があつてということ、前半はほとんどまとめてます。というのは、岸和田でもそうですけども、新しくそこへ住まれた方は、その地域の周りの歴史なんて誰も知りません。今は小さい子供にもそういうのを伝えていきませんので、子供もその村の歴史なんて知りませんが、この本にはすべてそれが入ってるんで、その地域の歴史であるとか、自慢にしていくところはどこやとか、そんなことも全部まとめて、地域住民に全部配って、地域全体の将来はこうしていこうという、まとめた本を全軒に配って、少しでもみんなの気持ちを同じ方向に向けていくという、そんな取り組みもしています。

この本を作るのも自分らで作っています。ある程度アドバイスなり、作業的にやってもらうのは、和歌山大学がかなり中へ入って整理をしたみたいです。

直売所「きてら」も最初は自分らで出資してやったんですけども、法人化にしていってます。地域に投資しなければ地域はよくなるという考えで次から次に投資して新しい事業をどんどん自分達でやっています。先ほどの「きてらセット」でも、びっくりするぐらいの注文が入って、インターネットで売ってます。オレンジジュースも、1人50万円の出資ということで、直売所の敷地内にジュース工場があります。本来はこれも農協がやらなあかなという思いはあるんですけども、ここは地元でやっています。

というのは、みかんずっとつくってきて、箱詰めして市場へ出荷しようと思ったら、外もよくて、中もいいやつがはじめて箱へ入れて出荷して、量販店の店頭へ並ぶんですけども、それだけやったら所得が上がらないので、見た目は悪いけども中のいいやつ、食べておいしいやつを全部加工します。今はオレンジジュースがすごく人気で、絞る量よりも売れる量のほうが多いので、品切れになってるみたいです。値段的には、晩柑類で70～80円/㎏支払うことができるぐらいになったと言うてますから、悪いことはないと思います。そういうことで、経済も含めて自分らでやっています。

地域に投資して、そこで法人化して、地域を活性化していこうということで考えだしたのが秋津野ガルテンです。先ほども言いました、小学校を秋津野ガルテンとして、宿泊施設、体験施設をやっています。

グリーンツーリズム事業ということで、いま全国的に都市と農村の交流をできるように取り組みが進んでいます。この地域は「思いから計画へ」ということで、秋津野ガルテンを運営しようということで進めています。

プラスαとして、秋津野ガルテンを拠点施設として、食の教育の事業、貸し農園、農家レストラン、オーナー樹事業、田舎暮らし支援事業、地域づくり研修受け入れ事業、その他ということで、去年の11月に秋津野ガルテンがオープンしまして、順番にこれをスタートしています。そういう形で地域を、農業生産だけじゃなしに、都会の人に来ていただいて、お金を使ってもらえるように、地域経済、人がたくさん来ることによって賑わいも含めて活性化しようということで取り組んでいます。

グリーンツーリズムをどういうふうに考えてきたかという、農業を守り続けることが地域を守るという形でむらづくりをつくってきてます。

地域産業が農業以外にあまりないですから、仕事は田辺市街地に出ないと勤め先がありませんので、地域の中で何か産業がないと、そこには人が残らないというのが現状です。そういう意味では昔から農業を守るということが、その地域、村を守る、という考えは一貫してずっと通ってきてる部分です。

かなり勉強されてまして、株式会社をすぐ設立します。秋津野ガルテンも株式会社秋津野ということで、株式にしています。資本金が4,180万円ということで、結構考えられてて、普通株式が1,190、これは地元の人、農業してる人の出資です。制限株式、これが900株あるんです。今はもっと増えてます。この制限株式というのは議決権がないんです。地域以外の人に出資を持ってもらうのは、この制限株式です。田辺市の議員の方もほとんど制限株式を持ってると思います。農協とかも制限株式の方を持って。住んではないけども、秋津野という地域が好きで、「きてら」によく買い物来たりとか、秋津野によく来るという方は制限株式を持っているみたいです。そういう意味で資本金4,180万円が今はもう少し増えてると聞いてます。

ここには専任でいま3名雇い入れて、全体の事業を運営してます。ただ、最初に話ありましたように、主体とか、ここの社長、副社長とかは全部地域の人です。すべて自分らが主体でやってます。株式にするということも全部自分らでやってるのが現状です。農業者の人が、役員になってます。

さっきも「持続」という言葉もありましたが地域を支えるシステムの構築ということで、非常に一生懸命考えてます。「夢を持った1人の住民の存在より地域づくりを継承していく「人」・「システム」づくりが必要」ということで、そういう意味では私たちの地域には、地域を支える3つの法人と地域づくり塾があり、そこに住民がかかわっているということで、

3つの法人というのは、社団法人上秋津愛郷会、株式会社の秋津野、「きてら」という形で、地域としてのシステムを作って、地域づくりをやっている。これが秋津野ガルテンの概要となります。今ここが地域づくりの拠点になっております。

非常に地域づくりには熱心な地域かと思えます。ただ、繰り返しになりますけども、必ず自分たちがすべて手づくりでやってるわけじゃないです、たとえば和歌山大学の力を借りたりして、「未来への挑戦」という冊子も作っているんですけども、考え方が、必ず前段にみんなの意見を聞いてきちっとした計画を立ててます。また地域にはリーダーがいます。ここにも株式会社秋津野社長とか、副社長もいましたし、ガルテンの社長もおられます。だからそんなリーダーがきちっと居て、実際に地域全体で変えていくために実践がある、計画があって、引っぱって行く人があって、実際に地域を変えていく人が、3つちゃんと揃ってるというのが非常に素晴らしいと思えますし、経済支えていく農業にしても、まず農業生産は一次産業といわれます、ジュースとかにして二次産業にもって行って、観光ということでガルテンを中心に三次産業にしていこうという、きちっと計算された計画の中で順番にやられてるというのが、この地域だと思います。簡単でしたけども、説明終わらせていただきます。

《委員長》

どうもありがとうございました。最後のほうで、「1人の夢を持った人間の存在よりも、地域づくりを継承していく人・システム作りが必要だ」という話があったんですけども、私なりに、あんなるほどなと思ったので、少しお話をさせていただくと、だいたいどの村でも、どの町でも、頑張る人は必ず何人か居るんです。その時に、「あいつは変わり者やから」という話になっちゃうんです。「あいつやから頑張れるんや」、「みんなで頑張れるわけないやないか」、と思わせないと言う所が、仕組み・仕掛けだと思えます。

つまりみんなお金出させていますよね。「みんなで責任持ってよ、あんたらも一緒にやるんやで」という仕組み・仕掛けにしてるという所が、おそらくうまくやられている秘訣ではないかなと、私には思いました。何かご質問とかご意見ございますでしょうか、せっかくの機会です。

《M委員》

今の秋津野の話、すごく感動を受けて聞きました。私も経験しましたが昔、減反政策というのがあって、みんなみかん植えたんですけど、その次にオレンジの自由化があったんですね。私のうちは農家なんですけど、昭和43年の暴落のときに、祖父は、これはあかんと思ったみたいで、孫には農業継がせるなと言って、結果的に私は農業を継いでないんです。

それで一つ言いたいのは、皆さん身に染みていると思うんですけど、国の政策どおりやってたら、農業やってる人は今まですごく大変やったんですね。だから自分らの将来は自分らで決めた方が良くないかというのが一つです。

父親が死にまして、みかん山が残ってましたので、山の手入れを始めたんです。なかなかおもしろいなと思ってまして、剪定もまだちゃんと出来ないですから、近所の人に教えてもらうんですけど色々なやり方があるようで、父親も苦労してたけどそういう点では楽しんでたのかも知れないなと思ってます。植物を育てるといのはなかなかおもしろいなと思ってまして、私は農業継がなかったにしても、身の回りに考える材料が沢山あったのに、なんでJ委員のように農業を研究しなかったんやろと、いま思ってるんです。

昔は田植えとかみかん狩りのときは、親戚の人みんな手伝いに来てくれて、一緒にお弁当食べたりした楽しかった思い出があって、いまそのままのことをできないと思いますが、これからのやり方に合った形で、賑わいがもう一度出てきたらいいなと思ってます。

もう一つは、今から将来の事を考えるんですけど、今、農業をやられている方には絶対頑張っただけかなあかんやろなと思ってるのは、企業が農業に参入した事例ですけど、1年も経たない間に破綻したんです。それは、農業というのは、天候も毎年違うし、経験がないと、全然太刀打ちできなかつた。ですからいま農業をやっておられて、毎年ちゃんと作物を実らせてる人は、すごいんだなと思ってるんですけど、カゴメがやっと10年目で今年の予定が出てきたという話なんですけど、最初の1年目は工場のトマトは全部枯らしちゃったらしいです。ですからやっぱり今やっておられる方の知恵がないと、農業でやっていくというのなかなか難しいだろうなと思ってます。

そういう意味で、一つは、自分らでいま考えることを考えよう、将来どうしたら良いかを自分らで道筋をつけれたらいいん違うかなと思ってるとというのが、いまの話をお聞きしまして、強く感じました。

《委員長》

ただ、先ほどの上秋津の例でいったら、マスタープランづくりというのは、M委員の得意分野なので、そういうところで貢献をしていただいたら、みんな役割分担できるんじゃないかなという感じもしています。

《N委員》

今の上秋津の事例を見せていただいて、最初、財産区財産を地域のために活用するということがされた。同じようなことが大阪の場合も、財産区財産を活用されてるのがあるんですけども、多いのは、例えば池を補修するから売った金額の幾らかを市の管財にいくらかの比率で取って、残りは地元負担金に回すとか、地域の公民館つくるときにやるとか、いわゆる財産区財産を配分に使っていました。しかし上秋津野は活用に使っているという所が根本的な違いだと思います。

非常にうまくされてますよね。同じく丘陵地区の場合も個人の土地を活用するということで、「俺の土地どうなんねん」じゃなしに、みんな土地を出資して、一定の地域をどうするか

という考え方からすると、同じような発想ですね。やり方は同じことはできないけど、これから色々やっていくのにも参考になるかなとお聞かせいただきました。

《委員長》

他にいかがでしょうか。また後ほどでもこういう話題を打ち出したいなと思います。ルールづくりとか、技術的なこともやらないといけないんですけども、折りを見て、こういう夢のある、将来が明るくなるような情報提供もさせていただきながら、頑張っていきたいと思っております。

その他事案で事務局より、先ほどL委員から「道の駅」の説明もして欲しいという話もありましたので、ご報告をよろしく申し上げます。

《事務局》

事務局から、まず一点目に地権者の皆様にご協力いただいたアンケート調査についてご報告等をさせていただきます。

3月16日現在ですけれども、約66%の回答率となっております。今回のアンケートは、具体的な内容をご提示していないにも関わらず、現在の時点での地権者の皆様の貴重なご意見を多数いただきました。今後、協議会での内容を加味して具体的な内容を提示し、回収率等にもこだわった形でのアンケート調査を行ってまいりたいと考えております。

ご意見につきましては、農的な展開などで色々ご意見をいただいております。また、「いまの経済情勢で、一体的な整備は難しいのではないか。」ということで、「各地域の状況に応じた、地域完結形の整備手法とか、そういった形での地権者の方の合意を目指したらどうか。」といったご意見とか、また、「社会環境の変化に追従できるような基本となる計画が重要ではないか。」また、「自然環境を守れるような自然への環境負荷を少なくして企業誘致などを進めていけば良いのではないか。」とか、「営農されてる方々も高齢化が進んでいるので、企業が農業法人として活用していけば良いのではないか。」とか、「岸和田市も農業法人を育てていけばいいのではないか。」などといったご意見がございました。

《各資料を基に説明しております。上記は要点のみ記載しております。詳しくは別添資料をご覧ください。》

次に2点目のご報告ですけれども、前回もご報告させていただいた丘陵地区での測量作業のその後の経過についてご報告させていただきます。

その後、業者が決まりまして何度か地権者の代表の方々とも打ち合わせ等させていただき、測量の内容がほぼまとまってまいりましたので、近日中に立会いをお願いする地権者の方々にご説明のご案内を発送する準備を行いたいと考えております。

今現時点での予定ですが、4月の半ばぐらいには、説明会を予定しており、4月末ぐらいから現地踏査や測量作業といった形の現地作業に進めていきたいと考えております。最後に三点目「道の駅」についてでございます。

《各資料を基に説明しております。下記は要点のみ記載しております。詳しくは別添資料をご覧ください。》

○「道の駅」先行整備について

「道の駅」の計画を進めるにあたり、市内各種団体との連携について、商工会議所、観光振興協会、JA岸和田、岸和田市漁業協同組合、春木漁業協同組合等々の連携・参画等を考え、それぞれの役割分担とか、計画づくりを進めていかなければならない。

また、JA岸和田さんを中心といたしまして、『(仮称)〇〇地域交流センター』を先行整備し、丘陵地区への波及効果を今後検討する。

《以上、各項目をそれぞれ説明後、》

以上でございます。

《委員長》

これで5回目の整備機構協議会は終了させていただきたいと思えます。来年度は、今日お認めいただいたように、少し具体化に向けて分科会方式も組み合わせながら進めてまいりたいと思えます。またご協力をいただければと思えます。どうもありがとうございました。

《事務局》

次回の開催の予定でございます。第6回ですが、5月18日(月)、午前10時から、場所は決まり次第お知らせしたいと思います。

なお、この協議会も、皆さまのおかげで、昨年9月から発足しまして、約半年で第5回を迎えることができました。今回のテーマにもありましたように、来年度からは、協議会におきまして丘陵地区整備の実現に向けまして、具体的な検討もさらに進めてまいりたいと思っておりますので、今後とも皆さまの更なるご協力のほどよろしく願います。

本日はどうもありがとうございました。

閉 会 午後0時13分